

美濃和紙あかりアート展

秋の夜長に
うだつの上がる町並みで繰り広げられる
「美濃和紙とあかり」の競演

(財)中部産業・地域活性化センター
客員研究員 坂口香代子

秋が少しずつ深まり始める10月上旬。岐阜県中濃地域にある美濃市では、夕暮れとともに全国から集まったあたたかな「あかり」たちの競演が始まる。「美濃和紙」と「うだつの上がる町並み」を融合させた「美濃和紙あかりアート展」の開催である。1300年の伝統を誇る美濃和紙を使用したあかりのアート作品を全国公募し、コンテストを行う一方で、何と集まった全ての作品が江戸時代の情緒を今なお残す町並みに置かれ展示されるのだ。1994年に始まったこのイベントは、今年で16回目を迎える。昨年は約600点ものあかりのオブジェたちが、2日間にわたって、訪れた人々の目を楽しませた。

今回からお伝えするシリーズ「あかりと文化」の各論第1回目は、この「美濃和紙とあかり」の競演から始めたい。



1. 『美濃和紙あかりアート展』とは

美濃和紙、を使ったあかりのアート作品を募集し、うだつの上がる町並み、に展示

『美濃和紙あかりアート展』とは、ひと言でいうと、素材として美濃和紙を使用し、あかり（光・光源）を用いた90cm以内の一体型立体造形作品をプロ・アマ問わず全国から公募。それを重要伝統的建造物群保存地区に指定されている美濃市の「うだつの上がる町並み」全体を会場として展示し、コンテストを行うというものである。

美濃市で、なぜこのような文化イベントが行われるようになったのか、その背景として、「美濃和紙」とは何か、「うだつの上がる町並み」とは何かを、まず簡単に紹介したい。

2. 『美濃和紙あかりアート展』開催の背景

1300年の伝統を誇る美濃和紙

奈良・正倉院にある文書資料のうち、年代がはっきりとわかる最古のものは、西暦702年(大宝2年)の美濃(御野)、筑前、豊前の戸籍である。当時は、自国の戸籍用紙は自国でつくられており、1300年もの昔から美濃にはすぐれた製紙技術が存在していたことがわかる。天平年間(710年～794年)

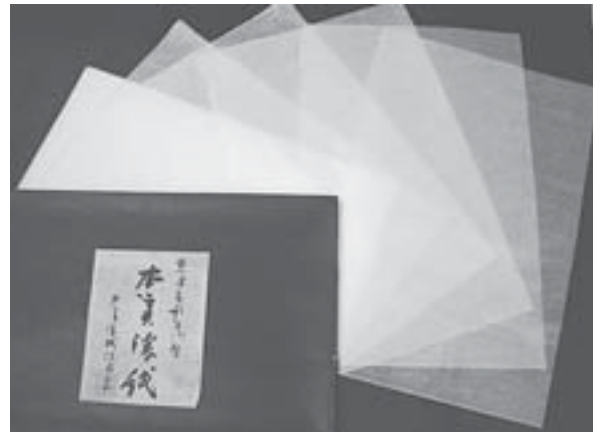


には、都で写経用紙として美濃紙が使用されたとの記録もある。この「美濃」は、岐阜県が「美濃の国」と「飛騨の国」に分かれていたころの「美濃の国」を指し、当時の美濃国の紙屋は、国府の置かれた不破郡垂井町あたり(現在の岐阜県西濃地方)にあった。

この時期、紙の需要を急激に拡大させたのは仏教であった。経文や經典の出現によって紙の消費量は膨大となり、紙の生産地も数を増していった。その中で、美濃産の紙は都での評判が極めて高く、贈答・献上品としても用いられたりしたという。

その後、美濃紙のつくり方は、西濃地方からしだいに中濃地方へも伝わり、現在の美濃市にも広まった。室町時代には、市内の大矢田に紙の市場が開かれ、岐阜県内だけでなく全国から紙を買い求める人が集まったといわれている。

江戸時代になると美濃紙の生産量はますます増



江戸時代、美濃随一の大手だった今井家。うだつの上がる町並みの中にあり、現在、当時の紙豪の様子をそのまま再現した「旧今井家住宅・美濃史料館」として公開されている。

大し、近江の商人らにより美濃紙は江戸等に進出するようになる。特に、書院紙（明かり障子用の和紙で書院造によって普及したためこの名がついた）として代表的な存在だった美濃紙は、その優れた抄紙技術に支えられて、幕府御用達の障子紙として納められることとなった。「御紙漉屋（おんかみすきや）」は諸役御免の扱いで、幕府の手厚い保護の様子がかがえる。これが、美濃紙が全国数ある障子紙の中でも折紙付きとなり、現在の「美濃紙」ブランドの根源となっている。

また、江戸時代以降、長良橋たもとの地域は、長良川を利用した運輸により重要な港町となり、奥美濃から美濃和紙などの陸揚げが多く、それを扱う問屋町として栄えた。良質な和紙「美濃和紙」を得た岐阜では、岐阜の工芸品である岐阜提灯、岐阜和傘、岐阜うちわが生まれた。

明治に入ると、政府はウィーン万博（1873年、明治6年）やフィラデルフィア万博（1876年、明治9年）に美濃紙を出品。同じ頃、長瀬（現美濃市長瀬）の紙商十代目・武井助右衛門が紙の海外

【和紙とは】

和紙とは、明治初めに西洋から伝わってきた洋紙（西洋紙）に対して生まれた語で、日本の伝統的な製造方法で作る紙（日本紙）のことである。洋紙も和紙も、もともとは紙の発明の地と言われる中国から伝播したもので、欧米では洋紙技術が、日本では改良され日本特有の製紙技術が発達。「美濃紙」のように、それぞれの産地名で呼ばれる和紙が育っていった。

現在、我々が一般的に使うノート類や、新聞・雑誌で使われる紙のほとんどは洋紙である。この洋紙は、松やブナなどの針葉樹、広葉樹の表皮を取り除き、内側の木質部を原料にした木材繊維、いわゆる木材パルプを主な材料にして機械により大量生産されたもの。

一方、和紙は、主に「楮（コウゾ）」「三椏（ミツマタ）」「雁皮（ガンピ）」という木の皮の繊維、いわゆる非木材パルプである韌皮（ジンピ）繊維を主原料にして、トロロアオイの根やノリウツギの樹皮などから抽出した粘剤「ねり」を混ぜ、手漉きで作る紙のことである。また、洋紙の生産技術を活用しながら機械漉きで作られる機械漉き和紙も、広義では和紙と呼ばれる。

本来の和紙の大きな特徴は、洋紙にはない風合いがあることと、薄くても非常に丈夫で、保存性にもすぐれていること。一般的に洋紙の寿命が100年と言われる中、1000年以上前につくられた和紙が正倉院で現存していることからその寿命の長さがわかる。これは繊維の長さが広葉樹の7～8倍という韌皮繊維を使っていることと、ねりを使う流し漉きの技法により、繊維の切断がほとんどなくつくれることなどから生まれる特徴である。近年、この和紙の優れた特性が国内はもとより世界から注目を集めており、絵画や文書など文化財の修復および保護に和紙は欠かせないものとなっている。



取引を始め、美濃紙をいよいよ世界へ送り出し、輸出先でも大好評を得たという。

その後、技術の発展、生活様式の変化などにより、障子紙、傘紙、謄写版原紙から、手漉（す）き和紙の特徴を活かした工芸的な多種類の紙が用途に応じて生産されるようになり、最盛期（1918年ごろ）には、生産者戸数4,768戸、従業員数17,782人を数えた。

今も普通の暮らしが営まれている

うだつの上がる、町並み

では、なぜ、美濃では1300年以上の昔から手漉き和紙があったのか？それは、山と川の挟間の痩せた狭い土地で作物が十分取れず、そのために、和紙の原料となる楮（こうぞ コラム『和紙とは』参照）を植え、長良川の豊富な清流を利用し、農業の傍ら和紙を漉き、生活を支えたからだといわれている。しかも美濃の冬の寒さは、和紙をつくる際、粘材として使われるトロロアオイの粘性をうまく引き出す好条件にあった。

この良質の原料と清流、気候の恩恵により根付いた美濃の和紙づくりを、和紙の産地として発展させた大きな要因は、長良川を利用した船運の拠点が築かれたことにある。

1600年（慶長5年）、関ヶ原合戦の功により、徳川家康からこの地を拝領したかなもりながちか金森長近は、長良



現在も残る「こうずちみなと上有知湊」灯台

川畔に小倉山城を築城。1606年（慶長11年）頃に、美濃の現在の町割りを完成させたといわれる。それとともに長近は、長良川に「こうずちみなと上有知湊」を開き、船運による経済の発展を目指した。長近の没後、1615年（元和元年）に尾張藩領となった後も、この画期的な川湊は船運による物資集散の拠点として機能し、和紙を中心とした経済活動が進み、町には次第に和紙問屋やいろいろな商売を営む者が増え、商家町として栄えたのである。そして1911年（明治44年）には、それまでの地名「こうずち上有知町」は、美濃紙にちなんで「美濃町」と改名し現在に至っている。

この、商業都市として繁栄した当時の姿を今なお残すのが、2つの大通りに4本の横丁が交差する「目の字型」の旧市街、通称「うだつの上がる



うだつの上がる町並みには、江戸～明治時代にかけて造られた商家が軒を連ね、古いたたずまいを見せている。家々の屋根の両端、妻に立ち上がっているのが「うだつ」（写真左上）で、デザインは、時代性や当時の財力により、一軒一軒異なっており、それを眺めて歩くだけでも楽しい。

町並み」である。

「うだつ」とは、本来は、屋根の両端を一段高くして火災の類焼を防ぐために造られた防火壁のこと。それが裕福な家しか「うだつ」をつくることができなかつたため、庶民の願望から「うだつを上げる」「うだつが上がらない」の言葉が生まれた。

現在、美濃市には全部で19棟、この「うだつ」が上がる家が残っており、これだけの数を残すのは、全国的にも珍しい。また、多彩な格子やむしこ窓、正面下屋庇上に設けられた辻堂風もしくは箱型の火防神などの意匠や造形にも特徴があり、江戸時代初期以来の独特な目の字型の街路構成を保ち、歴史的景観をよく伝えている。しかもこれらの家々のほとんどでごく普通の生活が営まれており、生きた町並みなのである。

「美濃和紙あかりアート展」は、この伝統ある町並みと和紙文化という2つの魅力ある財産をコラボレーションさせ、町の活性化につながる取り組みとして、1994年にスタートしたものである。その取り組みの経緯と特徴を次に紹介する。

3. 『美濃和紙あかりアート展』開催の経緯

当初、単年度事業として始まったイベント

「美濃和紙あかりアート展」開催のそもそものきっかけは、観光協会の民活化と新たな観光事業への取り組みとして、また1994年に美濃市が市制40周年を迎えたのに併せ美濃市観光協会の事業企画委員会で企画したもので、当初は、1回限りのイベントで終わるはずだったものである。

イベントの基本的な構想は、地域プランナーの花井孝さんの美濃市観光基本計画を基にし、観光協会が商工会議所・青年会議所・住民有志らで組織する「美濃和紙あかりアート展実行委員会」を設置。基本的な開催スタイルは現在とほぼ同じだが、「約80作品の応募は、集まったというより集めたという状況で、その大半は身内。その時は記念イベントの片隅で、狭い一歩地を使い、本当に

ひっそりと薄暗い通りに行灯とは趣向が異なるあかりのオブジェが並んでいた」（美濃市観光協会）感じであったという。

しかし、来場者の評判が良かったことから、観光協会の当時の事務局長が次の2つの目的を持って継続開催することを英断した。1つは、観光産業の育成であり、もう1つは美濃和紙のブランド化の進展である。

当時、美濃市美濃町は国から重要伝統的建造物群保存地区の指定を受けられるかどうかという時期でもあり、日本でも有数のうだつの上がる風情ある町並みを生かした観光産業育成への本格スタートは、ある意味、格好のタイミングだった。また、伝統的な美濃の手漉き和紙は、機械漉き和紙との競合や戦後における石油化学製品の進出などの影響を受け、転廃業あるいは自ら機械漉き和紙への転出化が進み、最盛期に約5,000戸あった生産者数は、わずか30戸に減少。非常に優れた独特の製紙技術を持ち、1300年もの伝統を築いてきた美濃和紙の衰退は、紙産業だけの問題ではなく、そのまま地域の衰退になりかねない問題であった。美濃和紙の「ブランド力」の維持・向上を図ることは地域の将来にとっても非常に重要であり、必要な挑戦であったといえよう。

結果、「美濃和紙あかりアート展」は、美濃ならではのうだつのみならず「町並みの風景」と「美濃和紙の新たな可能性」をアピールするという2つの挑戦を進める上で非常に適したイベントであるとして、継続開催が決まったのである。

全国から約600点の光のオブジェが集まり、来場者数は10万人規模に

美濃和紙あかりアート展は、1994年から一度も中止されることなく、2009年10月で第16回を数える出展数、来場者数とも、実行委員会の「予想を大きく上回る順調な伸び」を示している。（資料1参照）

スタートした年は82作品中72作品が岐阜県内からの出展であったが、2年目には県内出展者は半分程度になり、年を追うごとに応募地域が拡大

し、現在では沖縄を除くすべての県からの出展がある。

来場者数も、台風により体育館で開催した1998年は別にして、非常に順調に伸びており、2006年からは10万人規模の一大イベントに成長している。

4. 『美濃和紙あかりアート展』の特徴

応募作品は「全て、うだつの上がる町並みに展示

「美濃和紙あかりアート展」が、他のアートコンクールと大きく違う点は、応募作品が、建物の中でなく、屋外の町並みに展示される点である。しかもイベント当日に大きさなど作品規定の検査を通れば、「全て、の作品がうだつの上がる町並みに展示される。600点の応募があれば、600点全てが展示されるのである。自分の作品が「歴史ある町並みを彩るオブジェとして置かれ、訪れた人の目を楽ませる」という演出は、応募者の心を非常にくすぐり、これがこれだけの規模に成長した人気の一つの大きな要因になっている。

出展者はしぜんイベント参加者に

もう1つの特徴は、応募作品の受付も審査も全て当日行われることである。応募作品は、イベント当日に、応募者もしくは代理人が必ず受付と作品規定の検査を受ける。審査員は、展示された作品を一般の来場者と同じように、町並みを歩きながら鑑賞し審査していくのである。

これにより、応募者はしぜんイベント参加者となり、多くはその家族や知人とともに訪れるため、観客を動員する方策の一つともなっているのである。

学生の場合は、グループ応募が多く、学校関係者がバスで訪れるケースも多い。



当日、自ら作品を展示する出展者。

【資料1】美濃和紙あかりアート展開催データ

年	回数	出展数				来場者数	実行委員	当日 ボランティア
		総数	一般	小中	(岐阜県内)			
1994	1回	82	82	0	(72)	4000人	18	資料なし
1995	2回	155	99	56	(81)	7000人	25	
1996	3回	211	126	85	(65)	22000人	33	
1997	4回	298	145	153	(75)	25000人	32	83
1998	5回	277	125	152	(57)	10000人	35	45
1999	6回	310	180	130	(52)	25000人	44	85
2000	7回	429	263	166	(54)	25000人	48	100
2001	8回	456	296	160	(62)	40000人	48	150
2002	9回	641	447	194	(102)	75000人	48	150
2003	10回	650	420	230	(114)	90000人	58	250
2004	11回	511	317	194	(93)	50000人	59	300
2005	12回	499	355	144	(112)	56500人	58	350
2006	13回	390	236	154	(81)	100000人	56	450
2007	14回	480	347	133	(89)	135000人	60	550
2008	15回	510	326	184	(122)	100000人	60	400

当日持参が原則であるにも関わらず、応募者が沖縄を除く全国規模に広がっているのは、「自分のあかり」が情緒ある町並みを彩るあかりの一つとして展示される喜びとともに、いにしえの物語を彷彿とさせるうだつの上がる町並みと、スタイリッシュなアートが幻想的に融けあう様が、非常に旅情をそそる魅力ある観光資源になっているからだ。

プロも魅力を感じる そうそうたる顔ぶれの審査員

スタート時は、市長など地元関係者が審査員を務めていたが、美濃和紙あかりアート展の付加価値を高め、多くのプロも参加するコンテストにするため、現在では照明デザイナーとして世界的に活躍する石井幹子さんを特別顧問、岐阜県美術館館長を審査委員長として、建築家、インテリアア



夕暮れが訪れる午後5時、美濃和紙を使ったオブジェに一齐にあかりが灯される。



カラーでお見せできないのが残念だが、陽が落ち、あたりが暗闇に包まれると、アート作品に灯されたあかりが「うだつ」を美しく浮かび上がらせる非常に幻想的な光景に出会える。

【資料2】第16回美濃和紙あかりアート展の主な募集概要

開催日

- ◆2009年10月10日（土）、11日（日）

会場

- ◆美濃市うだつの上がる町並み（泉町・本住町・加治屋町・常盤町・相生町・俵町・魚屋町）

作品規定

- ◆あかり（光・光源）を用いた一体型立体造形。
- ◆作品の素材は主として美濃和紙を使用。
- ◆サイズは幅90cm×奥行90cm×高さ90cm以内

応募資格

- ◆プロ、アマ、年齢、国籍は問わず。個人、グループの共同作品、いずれも応募は自由。作品点数の制限なし。

応募料

- ◆一般部門：1作品につき1000円
- ◆小中学生部門：無料

テーマおよび賞

〔一般部門〕

- ◆テーマ：自由
- ◆美濃和紙あかりアート大賞（1点）…賞金50万円、賞状
- ◆美濃和紙あかりアート賞（2点）…賞金10万円、賞状
- ◆ライトアップ賞（数点）…賞金3万円、賞状
- ◆入賞（30点程度）…賞状

〔小中学生部門〕

- ◆テーマ：「豊かな海」「美しい森」「きれいな川」に関することを自由に表現
- ◆小中学生部門大賞（1点）…図書券3万円分、賞状
- ◆小中学生部門賞（5点）…図書券1万円分、賞状
- ◆入選（20点程度）…賞状

搬入・搬出

- ◆出展者本人または代理人での直接搬入・直接搬出

【資料3】美濃和紙あかりアートアクセスマップ （第15回の場合）



デザイナー、和紙アートディレクター、ペーパークラフトアーティスト、和紙デザイナー、造形作家として第一線で活躍する人々が審査員を務めている。

毎年、大募集される実行委員会メンバー

実行委員会事務局は、美濃市観光協会の中に設置されているが、実行委員会そのものは、全くのボランティアによる有志集団である。できる限り多くの熱い思いを持った人々に運営を任せたいというコンセプトのもと、毎年、実行委員会メンバーを大々的に募集。条件は、年齢18歳以上（高校生不可）、実行委員会に出席できること（都合の付く範囲での参加可）。現在は市内外の10～60歳代まで幅広い年齢層のボランティア約60人で構成されており、職業も、経営者、会社員、銀行員、建築士、デザイナー、公務員、学生、主婦など様々。その中で、役割に応じた小委員会（総務・広報、審査、会場、イベント、作品点検・補修、交通・警備等）を組織し、各小委員会で検討された企画を、実行委員会（全体会議）で諮りながら運営を行っている。また、実際に人が住む地域の生活空間を会場に開催されるイベントであり、住民の方々の協力はもちろん、市や商工会議所、青年会議所、自治会、近隣の中高、大学、ライオンズクラブ、森林文化アカデミーや金融関係団体など、ありとあらゆるところと連携を図り、イベント当日には当日ボランティアとして約400名を超える人々の参加により、運営されていることも、非常に大きな特徴である。

約80点の作品が常設展示される「あかりの町並み～美濃～」

そして、美濃和紙あかりのアート展が終わった翌週の金曜日から11月の末の1か月半を基本に、開催されるのが「あかりの町並み～美濃～」である。今年で第6回を迎えるこの取り組みは、2日間のイベントでは大勢の人出のためゆっくり見ることのできなかった人や土日限定のために来られなかった人などのために、作品をアクリルケースに入れて雨の日でも見られるよう常設展示をする

イベントである。毎年約80点の作品が町並みの軒先に並ぶ。作品の点数は少ないものの、和紙をとおした温かいあかりが町並みに灯り、情緒ある夜のたたずまいを散策できる。

アクリルケースは、2005年の愛・地球博において常設展示するために開発されたもので、これが有効活用されている。

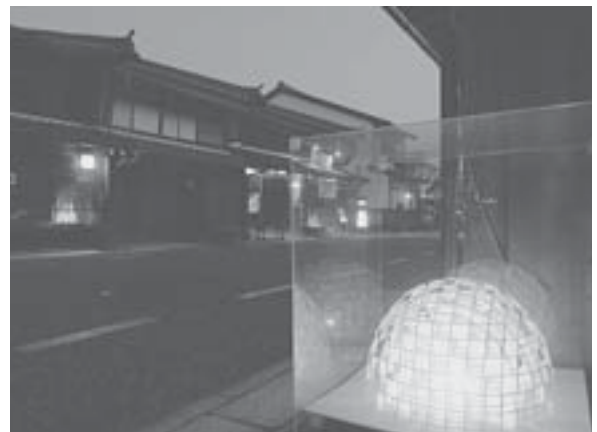
登録有形文化財を活用した「美濃和紙あかりアート館」

さらに、年間を通じて観光客に「あかりアート」を楽しんでもらう施設として、国登録有形文化財である旧美濃町産業会館を改修し、2005年にオープンしたのが「美濃和紙あかりアート館」である。1階では美濃市内の業者が創作したちょうちんやあかりの作品が販売され、2階は美濃和紙あかりアート展で賞を受賞した作品が展示されるミュージアムで、夜のうだつの町並みに迷い込んだような幻想的な展示空間となっている。

5. 『美濃和紙あかりアート展』がもたらしたもの

「伝建地区」取り組みと相乗効果を発揮

あかりアート展が開催される美濃のうだつの上がる町並み一帯は、1999年に国選定重要伝統的建造物群保存地区に選定された。これにより、美濃



「あかりの町並み～美濃～」では、約1か月半、作品をアクリルケースに入れて、うだつの上がる町並みに常設展示される。



「美濃和紙あかりアート館」。祭日だった取材日、30分ほどの間に10組ほどの個人の観光客が訪れていた。

市では、電線地中化や路面整備を一気に進めた。通常は、20年ほどかけて取り組むところを5～6年で急激に整備し、電線地中化は2003年に完了した。整備にあたっては、一つの区間を整備するにも半年～1年かかり、その間、工事が行われている区間は通行止めになることもあり、特に町中で商売を営む人にとっては商売の大きな障壁となるため、地元の反発は非常に大きかった。しかし、将来を見据えた市長の決断により電線地中化が完全実施され、それまで、うだつはあるものの、電線によりその趣が損われていた景観が見事によみがえり、現在の非常に情緒ある町並みへと変貌したのである。電線地中化がスタートしたのは、あかりアートが6回目を迎えていた時。出展総数が300を超え、来場者数も25,000人に達し、町に活気と誇りをもたらすイベントとして育ちつつあったころである。美濃和紙あかりアート展スタートの1年前ごろから、自主的に「美濃の町並みを愛する会」や「町並み案内ボランティア」も発足しており、「美濃和紙あかりアート展」などを通じ、うだつの上がる町並みや美濃和紙の歴史的価値について住民自らが認識し、住民が中心となりまちづくりに参加してきた素地があったことも、その中で電線地中化を促進させたと考えられる。

「みんな参加者」型イベントが育んだ組織の発展

現在、美濃和紙あかりアート展は、10万人を動



電線地中化以前のうだつの上がる町並み。

員する大イベントに育っているが、あくまで2日間限りの限定イベントである。しかし、観光協会に寄せられる声では、美濃和紙あかりアート展をきっかけに、美濃に触れ、もうすこしじっくりと美濃のまちを見て回りたいと、再び訪れる意向を示す人は多い。

そして、美濃和紙あかりアート展の成功は実はもう一つ別の広がりを見せ始めているのだ。それは美濃和紙あかりアート展が、行政主体ではなく、住民組織によって運営され、実際に人が住む地域の生活空間を会場に開催されるイベントであるという特徴と関連の深い展開だ。出展作品は、その作品が置かれる場所に近い各家庭の電源を使用させてもらう。また、当日のあかり点灯時には、各家庭には、家の光が外にもれないように配慮してもらわなければならない。ある意味、住民に様々な負担を了解してもらって初めて行えるイベントである。当然、このイベントが始まった当初の住民の困惑は想像に難くない。しかしそれに対して実行委員会が、その年の日程が決まった時、イベント前に作品を置くための位置確認を行う時など、何度か「今年もお願いします」と町並みにある家々を訪ね、ひたすら地道なコミュニケーションを15年間続けてきた結果、現在ではあかりアート展の魅力にはまり実行委員として関わる人、当日ボランティアとして参加する人などが大勢生まれている。

これを現在の実行委員会の深和委員長は、「ま

だまだこれから」と前置きしつつも、「応募者、来場者、そして町の人それぞれに魅力を感じてもらえる運営を行う上で必要な組織の進化が少しずつだが進んできた」と見ている。「以前は、実行委員会が運営の全てを実際に行っていたが、現在は、それぞれの実行委員の下に数人のボランティアがおり、彼らが主体的に実際の運営を行ってくれる。そのため実行委員はもう少し広くイベントを眺めることができ、それまでは気づかなかったことに気づくことができる」。

「全国あかりサミット」の開催

前述のアクリルケースの開発によって、現在では、作品の貸し出しも積極的に行われている。美濃の「あかり」たちが全国各地に出張し、それぞれのイベントで活用されているのである。秋になるとこれまでの優秀作品のほとんどが出払うほど人気を呼んでおり、美濃和紙あかりアート展のPRになるとともに、貸出料は、主催者の貴重な財源となっている。

昨年は、初めて海を渡り、韓国^{ウォンジュ}の原州へも。原州は韓国の紙の産地で、原州の使節団が美濃市を来訪した際、あかりアートの作品を見て気に入り、市をあげたお祭りで使いたいと依頼があったのである。

さらに、2007年から、美濃和紙あかりアート展実行委員会の声かけによりスタートしたのが、「全国あかりサミット」である。「あかり」を使って地域おこしに取り組む日本各地の関係者が一堂に集い、各地域の取組みを紹介するとともに、成功の秘訣や今後の課題などについて意見交換を行うというものである。第1回は美濃市で、第2回は香川県高松市で開催された。現在、10都市の参加があり、関係者約100人が参加するサミットとなっている。

ティファニーから届いた黒い封筒

この「美濃和紙あかりアート展」の取り組みは、各方面から高い評価を受けており、2002年には第6回ふるさとイベント大賞・総務大臣賞を受賞。



東京の青山に「出張中、のあかりたち。東京のきらびやかなネオンにも負けない美しさを放っている。

そして、2007年の12月、まるでクリスマスプレゼントのように、ティファニーから一通の非常にシンプルな黒い封筒が届いた。ティファニー財団賞への応募の要請である。ティファニー財団賞とは、日本国際交流センターと米国のティファニー財団との協力により、日本の伝統文化の振興と地域社会の活性化に功績のある組織に対する顕彰を目的として2007年12月に創設されたもの。日本各地から応募された各種の取り組みの中から審査が行われ、第1回目となる2008年ティファニー財団賞・伝統文化大賞受賞に見事、美濃和紙あかりアート展実行委員会が選ばれたのである。

「本事業は美濃の街づくりを考える市民の手によって行われ、美濃和紙と伝統的な町並みを最大限に活かしながら、新たな可能性を引き出そうとしている。また住民が一体となり、小学生から高校、大学生の若い世代が積極的にこの事業に参加していること、そして全国にあかりをテーマにしたイベントのネットワーク化を図ろうとしていることなど、さまざまな点で創意工夫が見られ、常に未来に向かって挑戦する姿勢が見られる」というのが、受賞理由であった。



ティファニー財団賞伝統文化大賞トロフィー。



第1回ティファニー財団賞伝統文化大賞受賞風景。

6. 『美濃和紙あかりアート展』の課題とこれから

インタビュー



美濃和紙あかりアート展実行委員会

実行委員長 深和昌司さん (写真中央)

美濃市観光協会 事務局長 池村周二さん (写真右)

美濃市観光協会 コーディネーター

犬飼千浩さん (写真左)

一人歩きをはじめたイベントをどうディレクションするか

—美濃和紙あかりアート展は、今では、2万3千人ほどの人口規模の美濃市に全国から10万人もの人を呼び込む一大イベントになっていますが、現在の課題はどのようなことでしょうか？

深和 これは非常にありがたいことでもあるのですが、ある意味、今、美濃和紙あかりアート展は「一人歩き」を始めており、これが課題の一つになっています。現在、このイベントの告知広告にはほとんどお金をかけなくてもいいほど、各方面での認知が高くなっています。2、3年前からは、新聞社や応募雑誌などから募集要項が出来上がるころに掲載させてほしいという要請も多く、今年は北海道新聞にも掲載されました。これは、我々の予想をはるかに上回るスピード。出展者・来場者の方々はもちろん、実行委員会の委員、地元自治体や住民、当日ボランティア、美濃市、岐阜県、美濃商工会議所、美濃市観光協会、協賛企業・団体、後援団体など、このイベントは、地域の中で協力いただいているところはないといってもいい

いほど、多くの方の支援と協力によって運営されており、その力が、このような発展につながっていると感謝しています。そしてこのさまざまな力が合わさった取り組みの成果が、2002年のふるさとイベント大賞受賞、2005年の愛・地球博での展示、2007年に行われた岐阜県のデスティネーションキャンペーン^(※1)での人気、2008年のティファニー財団賞受賞につながり、これらによって一気に人々を呼び込むイベントへと成長したわけです。

しかしその一方で、急激に成長したため、我々の受け入れ側がその規模に見合う態勢になっていないというのが実情で、これをどう整えていくのかというのが、今、一番の課題です。

犬飼 特に安全面ですね。イベントの運営そのものは実行委員会や当日ボランティアによって、完全ボランティアで実施していますが、それでは足りないため、一部、警備や案内を警備会社に委託しています。これにはお金がかかりますし、来場者に行き届いた対応を行うという面でもまだ課題があります。

池村 このイベントは非常に「ウェルカム」の状態で始めたのです。公共交通機関による来場が不便なこともあり、現在はシャトルバスによるパーク&ライドによるアクセスを行い、駐車場は一台500円の協力金をいただいています。おとしまでは駐車場も全くの無料で行っていました。500円とはいえ、それまで無料から考えると「お金はとられる、人はごったがえしで作品がよく見られない」という声があることは事実で、費用の問題と安全面、その中でどうやって最大限のおもてなしができるかという取り組みをあらためて考える、今、非常に大切なターニングポイントに来ていると思っています。

(※1) JRグループ(JR北海道・東日本・東海・西日本・四国・九州)と指定された自治体、地元の観光事業者等が協働で実施する全国規模の大型観光キャンペーン。

回を重ねるごとに、 美濃和紙と地域の可能性を引き出す 「美濃和紙あかりアート展」に

—そういった課題がある中で、どのような「これから」をお考えでしょうか？

深和 非常に大きな課題がある一方で、その分、このイベントには「可能性」がたくさんあると感じています。美濃和紙あかりアート展開催のあと、反省会を行うと、実は「もうこのイベントをやめようか」と思うほど反省が出てくるのです(笑)。これはそれぞれのフィールドでみなさんが真剣に取り組んでくださっているからです。そこで出た意見をもとに、例えば次の年には看板を増やしたり、シャトルバスのルートや乗降所の変更を行っ



美濃和紙あかりアート実行委員会事務局のある美濃市観光協会。うだつの上がる町並みにあり、「番屋」という1階の店では美濃和紙の他、美濃和紙を使った企画作品が販売されている。



美濃和紙から生まれたウェディングドレスが店頭飾られているギャラリー。従来の「紙」の概念を覆す商品も生まれている

たりしました。問題があることに対して、対応していこうという意識が非常にあるのです。

池村 このイベントは、結局、心遣いが人を惹き付けていると思っています。賞をいただきましたが、美濃和紙あかりアート展が表彰されたというより、地域全体での取組みが評価されている。そのためには、このイベントを規模の問題ではなく、出展者も、来場者も、そしてボランティアや町の方々も気持ちよくできる「美濃和紙あかりアート展」に育てていくことが重要だと思います。深和委員長も言われたように、これまでの取組みを考えると、それはできていると思っています。

犬飼 私は、実は3年前からこのイベントに関わるようになったのですが、正直、それまでは美濃市に住んでいても、うだつのある町並みを意識したことは全くなかったのです。この町の良さにまさに気づいていなかった一人（笑）。しかし今では、純粹にこの町が好きで、美濃には美濃和紙があり、うだつの上がる町並みがあり、あかりアート展があると胸を張って言えます。これはやはり「美濃和紙あかりアート展」に関わり、多くの出展者、来場者と触れ合ったからです。ある審査員の先生が「美濃和紙あかりアート展が回を重ねるごとに、美濃和紙の可能性を感じさせてくれる」とおっしゃった言葉が非常に心に響いています。これはつまり、このイベントに関わる全ての人が美濃和紙の可能性を育てているわけです。その一員として誇りを持って取り組みたいと思っています。



美濃和紙と暮らしを結ぶさまざまな商品が並ぶ小売店。現在、うだつの上がる町並みには、こういった観光客が楽しみながら買い物ができる店が点在している。